

報告

ATAC カンファレンス 2013 京都

神奈川リハビリテーション病院 柏原 康德

1. はじめに

2013年12月13日(金)～15日(日)に国立京都国際会館にてATACカンファレンス2013京都が開催された。ATACカンファレンス(以下ATAC)とは、障害のある人や高齢者の自立した生活を助ける電子情報支援技術とコミュニケーション支援技術の普及を目的としたカンファレンスである。

2. ATACのテーマ

今回は「比べて観る」というテーマのもと以下の2つをキーワードに進められた。

基本に帰る：日々の忙しさの中で先輩から後輩へのいわゆるツボの伝達が不十分なのか、若い人の中には大事なポイントが抜け落ちた形だけの教育や支援が見られる。そこで障害のある人の支援や教育において見失ってはならないものを伝える。

先を観る：近年様々な技術が登場し社会制度もめまぐるしく変化中、これから未来がどうなっていくのか見通しをもっていないと教育やリハビリが陳腐化していく。そこで「タブレットと絵カード」「人とロボット」など2つの対比を楽しみつつ、ロボットなど最新の技術を紹介しながら未来について考える。

3. ATACの参加者とセッションを通して

私がATACに参加するのは2012年、2013年の東京に続いて3回目である。ATACの参加者は、特別支援学校の教諭が大半を占めていた。そのため学校での生活場面の事例が多く挙げられている。普段病院内でエンジニアとして働いている私にとっては、毎回新鮮な気持ちにさせられる。今回のATACは、従来

のATACのように5つ以上のセッションが同時進行するのではなく、大きく2つのセッションに絞って同時進行することで、セッションを通じて多くの参加者と情報を共有することができた。

その中でも早稲田大学人間科学学術院の畠山卓郎教授による「支援技術活用におけるポイント-気づき、共感的視点、納得のプロセス-」や日本福祉大学の渡辺崇史准教授による「肢体不自由がある人のパソコンやスマホ操作で注意すべきこと」の2つのセッションは、エンジニアの視点による発表であり共感する部分が多かった。講演の中では、『支援する相手の病気や疾患、あるいは第三者からの意見から作られる先入観を排除する。そして私たちがすべきことは観察者、対話者、共感者としての視点で利用者との場と時間を共有することで相手の価値観に近づき本当のニーズを引き出し支援することである。』という言葉があり、一番印象に残っている。その他のセッションでは、成功した事例を紹介するだけでなく、失敗した事例も挙げることで、目的に沿った環境設定や機器の適合、介入の方法、理想的な支援の方法などが理解しやすい内容となっていた。

これらのセッションを通して、私がしてきた支援が物ありきの支援になっていなかったかを振り返る良い機会となった。

4. おわりに

私にとってATACは、新しい技術や物の見方について発見する場であり、今後の支援や仕事についてモチベーションを高めてくれる場でもある。今後もATACに参加することで新しい発見をしていきたい。

神奈川リハビリテーション病院
〒243-0121 神奈川県厚木市七沢516